第 173 回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成３０年９月２０日提出）

１．題　目：　「専門を専門外の学生に教える際の工夫」についてみんなで考える

２．日　時：　平成 30 年 9 月 11 日（火）　13:00-14:30

３．場　所：　A-12 番教室（教養教育棟 1 階）

４．主　催：教務委員会
　企画・実施：　評価・FD 教育改善専門部会

５．対　象：　全教職員（非常勤を含む）

６．長崎大学ＦＤに関する申合せ第２第１項の該当について【複数選択可】
　（該当するものに○を記入すること）
　［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
　［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
　［　　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
　［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
　［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）
　専門外の学生に教える際の注意点について理解する。専門外の学生に教える際の具体的な工夫について理解する。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）
【講師】
　前村浩二 教授（医歯薬学総合研究科）
　古本裕美 准教授（留学生教育・支援センター）
　庵谷治男 准教授（経済学部）
【内容】
　専門外の学生に教える際の工夫について 3 名の先生から事例紹介をしていただきます。また、フロアも含めて専門外の学生に教える際の工夫や問題点について議論します。

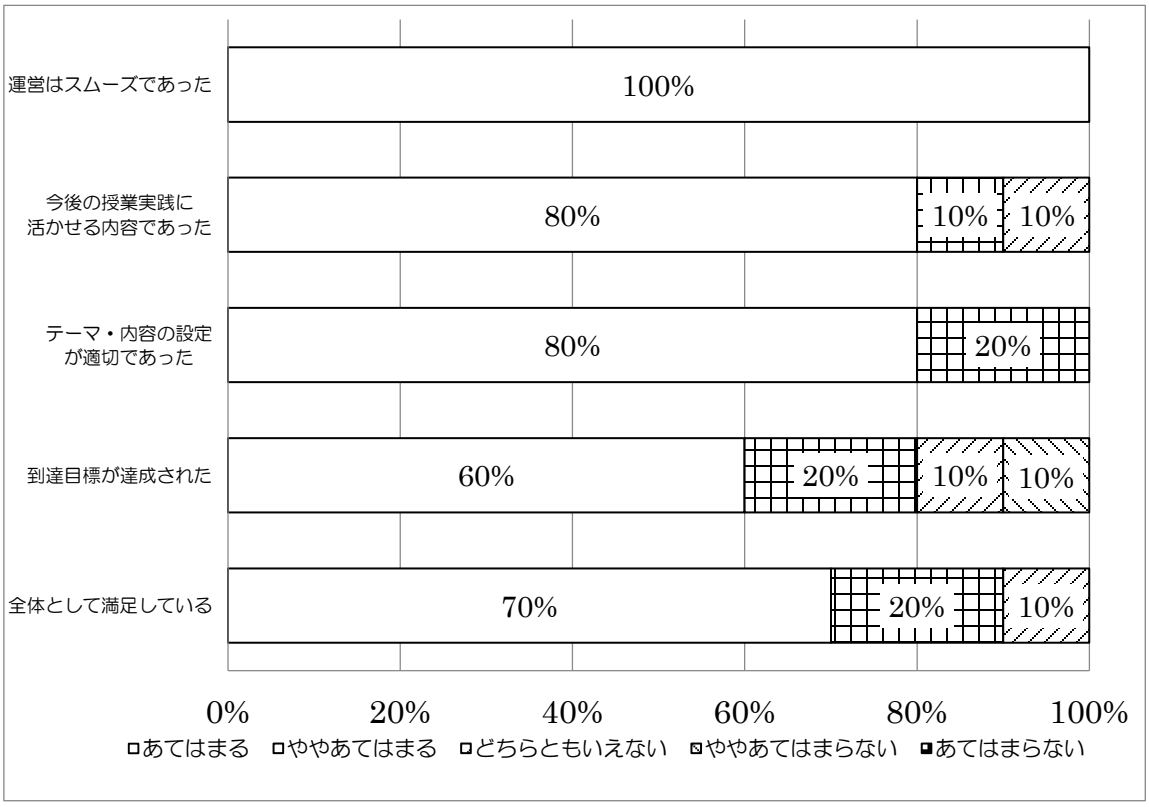
９．参加者：　18名（受講証明書発行対象者：　名）

（内訳）

所　属	人　数
ICT 基盤センター	1
医歯薬総合研究科（医学系）	2
経済学部	1
教育学部・教育学研究科	3
病院	1
工学研究科	1
グローバル連携機構	1
医歯薬総合研究科（薬学系）	1
環境科学部	1
医歯薬総合研究科（歯学系）	1
留学生教育・支援センター	1
医歯薬総合研究科（保健学科）	1
大学教育イノベーションセンター	3
計	18

１０．実施したＦＤの成果等

1.　　参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）



Ⅱ．今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。

・実際に使用している授業内容をお示しいただき、大変参考になりました。
ぜひ、活用したいと思っています。〃

・講義のやり方を例をあげて説明してくれたが、こちらが知りたいのは適切なゴールの設定であった。

・特にありません。

・私は省庁からの出向者なので、いろいろと勉強になりました。今後、学生へ授業をしていく上で専門科目をその学部生に教えるという面においても大変参考になる内容だったと思います。授業としては、前期の終わりに、前任者から引き継いだゼミを一回だけ実施した際、身近な例を出したり、図などを多めに使ったりしたところ、もともと学生の反応は悪くはなかったのですが、今日のお話をお聞きして、間違ってはいなかったと思えるようになりました。

・モジュールにおける専門外に教える工夫がわかった。これは、専門を専門の学生に教える際にも使えそうであった。

・発表いただいた先生方はみなさんいろいろと考えられており、その試行錯誤が授業の良しあしにつながるのではないかと考えた。

・動画や絵を多用していたが、どこでその情報を得るのか、どこまでインターネット上のものを使用できるのかなど疑問に思った。

・いろいろ質問したかったが勇気がなかった。次回の反省としたい。〃

・他学部（専門外）の学生に興味を抱かせて、能動的な授業を展開するためには様々な工夫が求められるので悩ましいと思っていました。今回の FD に参加して、ヒントが得られて有意義でした。３名の先生の共通点として「生活関連するようなテーマ」「動画（音声）などを用いる」が挙げられたように感じましたので、全学教養の際は活かしたいと思います。

・各講師の具体的な工夫をお話しいただき、今後の参考となるところが多かった。
個別の事例の紹介なので、今後、このような事例紹介が蓄積され、共有、活用されると良いと感じた。

・教養教育の授業では各専門の先生が創意工夫をされていることが大変よくわかり、勉強になりました。とくに、専門をどこまでかみ砕くのかという問題意識を共有できたことは自分だけの問題ではないのだという点で少し心が楽になりました。今後も引き続き試行錯誤をしていきます。ありがとうございます。

・今年４月に赴任してきました。様々な学部・研究科の先生方のお話が聞けることを、とても楽しみにしつつ、非常にありがたく感じています。次回の講座が、楽しみです。ありがとうございました。

2.　総　括

専門外の学生に専門を教える―全学モジュール担当者にとって、自身が担当可能な専門分野の内容を、専門の異なる他学部生にいかにして教えるかは頭の悩ませどころであり、工夫のしどころでもある。本プログラムでは、全学モジュール科目を担当する３名の教員から、専門外の学生に教える際の工夫について紹介がなされ、その後、質疑応答と意見交換がなされた。

前村教授担当の全学モジュール科目「生活習慣病の予防」において、工夫の観点は、「興味を持たせること」と「興味を保つこと」である。前者における具体的な工夫は、生活習慣病を受講者自身の課題として認識させること、その達成のために受講者の今の食事や生活の振り返りと未来予想を課したことであった。また、後者では、視覚的資料を多用して受講者の記憶への定着を図るとともに、授業中の発問と調べ学習（アクティブ・ラーニング）によって授業への関心を維持した。

古本准教授による紹介は、外国人をはじめ多様な人との円滑なコミュニケーションに重要な“やさしい”日本語を扱う授業である。「興味を持たせる」ための工夫として、授業で例示する“やさしい”日本語が必要な場面を、受講者が所属する学部に応じて意図的に選択した。また、「理解を進める」ために、多数の場面を提示し、練習問題やインタビューによる“やさしい”日本語の実践を課した。提出物にコメントを付すフィードバックが、学生との関係性の構築、ひいては学修意欲と講義の理解を促すことは、専門が異なる学生でも同様であった。

庵谷准教授は、会計学を扱うモジュール科目「現代経済と企業活動」から報告した。身近とは言い難い会計を身近なものとして捉えさせた工夫は、架空の店舗を受講者が開いて損益運営計画を立てる、という状況を仮定し、模擬的な実践学習を課したことである。運営計画を発表する際は、プレゼンテーションのみを最終目標とせず、他の受講者からの出資獲得を目指すというゲーム的要素も併せ持たせることで、授業に対する受講者の興味を持続させることにも成功した。

講師による工夫は、いずれも具体的かつねらいが明確であり、参加者の今後の授業設計の参考となるものだったと思われる。受講者に興味を持たせるためには、受講者自身にも関係する課題として授業内容を認識させることが重要である。今回紹介された工夫の多くが、実用的あるいは身近な事項を授業の題材とすることでこれを達成するものだったことから、講演後には、抽象的概念を扱う授業における工夫について意見交換がなされた。また、汎用的技能の修得とともに、教養教育あるいは専門外の学生に対する授業において求めるべき学問的水準の設定に苦心しているとの意見も出された。

（文責：環境科学部　西山　雅也）

１１．実施代表者の連絡先

教務委員会委員長　塚元　和弘
e-mail：ktsuka@nagasaki-u.ac.jp
電　話：内線 2003

１２．申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班
　主査　寺川 美穂
e-mail：fd@ml.nagasaki-u.ac.jp　　電　話：内線 2077

【重要度２（指定外の配付禁止，教職員限り），教育支援課】

第173回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成３０年９月２５日提出）

１．題　目：　わかる！作れる！ルーブリック！

２．日　時：　平成30年9月21日（金）　14:00-15:45

３．場　所：　A-33番教室（教養教育棟3階）

４．主　催：教務委員会
　　企画・実施：　評価・FD教育改善専門部会

５．対　象：　全教職員（非常勤を含む）

６．長崎大学ＦＤに関する申合せ第２第１項の該当について【複数選択可】
　（該当するものに○を記入すること）
　［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
　［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
　［　　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
　［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
　［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）
　ルーブリックの利点を踏まえ、実際に授業で活用できる・担当する授業内容に合わせたルーブリックを作成できる。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）

【講師】

成瀬尚志 准教授

北村史 助教

前田裕介 助教（以上　大学教育イノベーションセンター）

【内容】

　ルーブリックの基本的な知識や実際の活用事例について紹介します。

　また、フロアで実際に作成し、その過程や完成したルーブリックについて議論することで、個々の授業に合わせたルーブリックの作り方のポイントをつかみます。

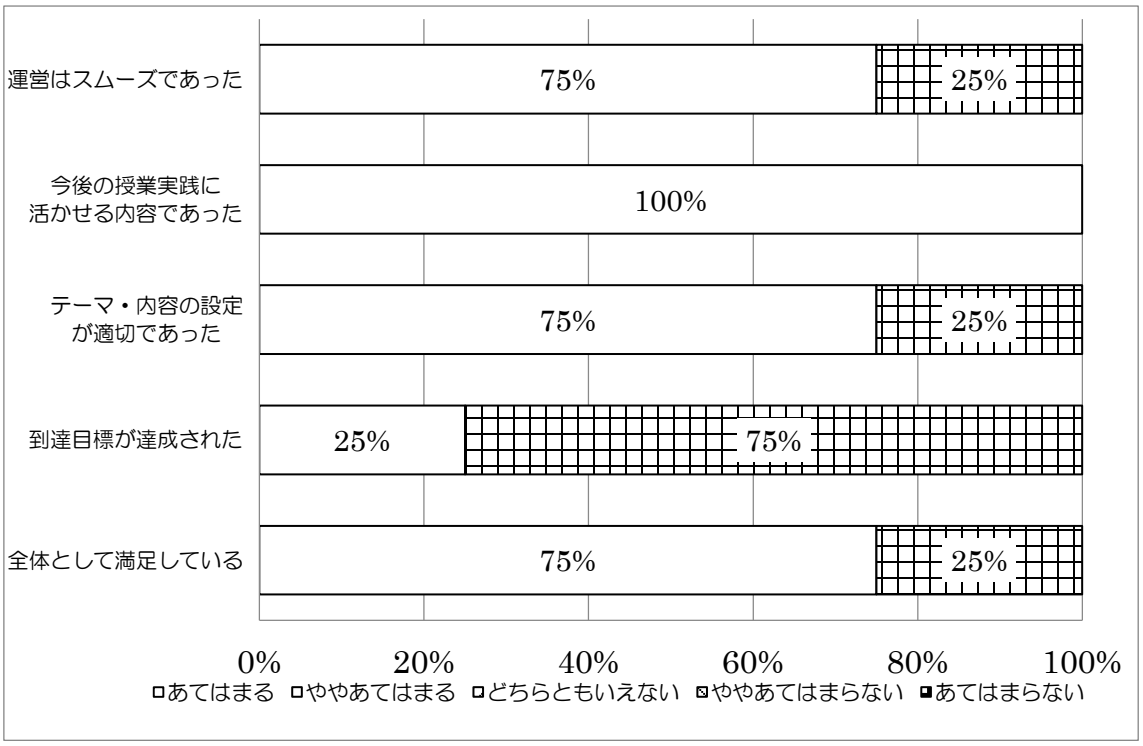
９．参加者：10名（受講証明書発行対象者：　名）

（内訳）

所　属	人　数
歯学部	1
熱帯医学・グローバスヘルス研究科	2
教育学部	2
病院	1
言語教育研究センター	1
大学教育イノベーションセンター	3
計	10

１０．実施したＦＤの成果等

1.　　参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）



Ⅱ．今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。

・もっと多くの例をあげての説明が欲しかった。ワークをするには時間が少ない。ルーブリックを普段使用している先生には良かったのかも？

・ルーブリックの基礎を再確認することができとても勉強になりました。ありがとう

ございました。

・私自身、ルーブリックでは厳しく評価を行っており、それによって学生の伸びを感じています。ただ、それに満足せずに、より精緻化したものに改善する必要を感じました。

・ルーブリックの内容をあまり理解していない状態での参加でしたが、グループワークを通して他のグループメンバーやファシリテーターの方とのやりとりにより、かなりイメージしやすくなりました。使いこなすには実践と経験が大切であることを感じましたが、学生指導にはかなり有効なツールであると認識しました。

Ⅲ．長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。

・東大の栗田先生が主導しているＴＰチャートを体験してみたい。

2.　　総　括

今回の FD は，「わかる！作れる！ルーブリック！」というタイトルで，「ルーブリックとは何か」からはじまり，使用するメリット，留意点を学んだ後に，実際に 2 グループに分かれて，課題ルーブリックを作成し，学生が書いたレポート課題を評価した。

ルーブリックとは，課題あるいは科目等に対する明示された評価観点（複数）とそれについての評価尺度（複数）によって，評価の視覚化・客観化を可能にするツールであり，基本は，従来からあった，評価項目別の表と似ている。しかし，ルーブリックを作成したり，明示して議論したりすることにより，１）教員と学生や，オムニバス授業での教員同士の意思疎通が明確になり，２）目標が明確になることで授業も改善され，３）何を目指せばよいかが明確になるため、学生のやる気や勉強方法の改善につながるなど，多くのメリットがあることがわかった。

また，グループワークでは評価観点も評価尺度も深化させていくこともできたし（項目が多くなっていく傾向がある），それぞれの観点・尺度の中身を説明する評価基準を考えることで，評価観点・尺度を見直すこともできた。ただ，これをどんどんやっていくと，ルーブリックが複雑になりすぎるので，深く考えた後に，簡素化することがコツだと思えた。

個人的感想としては，良く工夫された FD であったので，参加者が少なかったのは残念であった。それは「ルーブリック」という言葉がそもそも弊害となっているのではないかと思う。「FD」にしても，「ルーブリック」にしても，内容を表す日本語概念の導入が急務だと考える。

（文責：熱帯医学・グローバルヘルス研究所　門司　和彦）

１１．実施代表者の連絡先

教務委員会委員長　塚元　和弘
e-mail：ktsuka@nagasaki-u.ac.jp
電　話：内線 2003

１２．申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班
　主査　寺川 美穂
e-mail：fd@ml.nagasaki-u.ac.jp　　電　話：内線 2077

【重要度２（指定外の配付禁止，教職員限り），教育支援課】

第173回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成３０年１０月２６日提出）

１．題　目：　「大人数講義での工夫」についてみんなで考える

２．日　時：　平成30年9月25日（火）　14:00-15:35

３．場　所：　A-12番教室（教養教育棟1階）

４．主　催：教務委員会
　企画・実施：　評価・FD教育改善専門部会

５．対　象：　全教職員（非常勤を含む）

６．長崎大学ＦＤに関する申合せ第２第１項の該当について【複数選択可】
　（該当するものに○を記入すること）
　［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
　［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
　［　　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
　［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
　［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）
　大人数講義での注意点について理解する。大人数講義での具体的な工夫について理解する。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）
【講師】
浜田久之 教授（医療教育開発センター）
前田裕介 助教（大学教育イノベーションセンター）
【内容】
　大人数講義での工夫について 2 名の先生から事例紹介をしていただきます。また、フロアも含めて大人数講義の際の工夫や問題点について議論します。

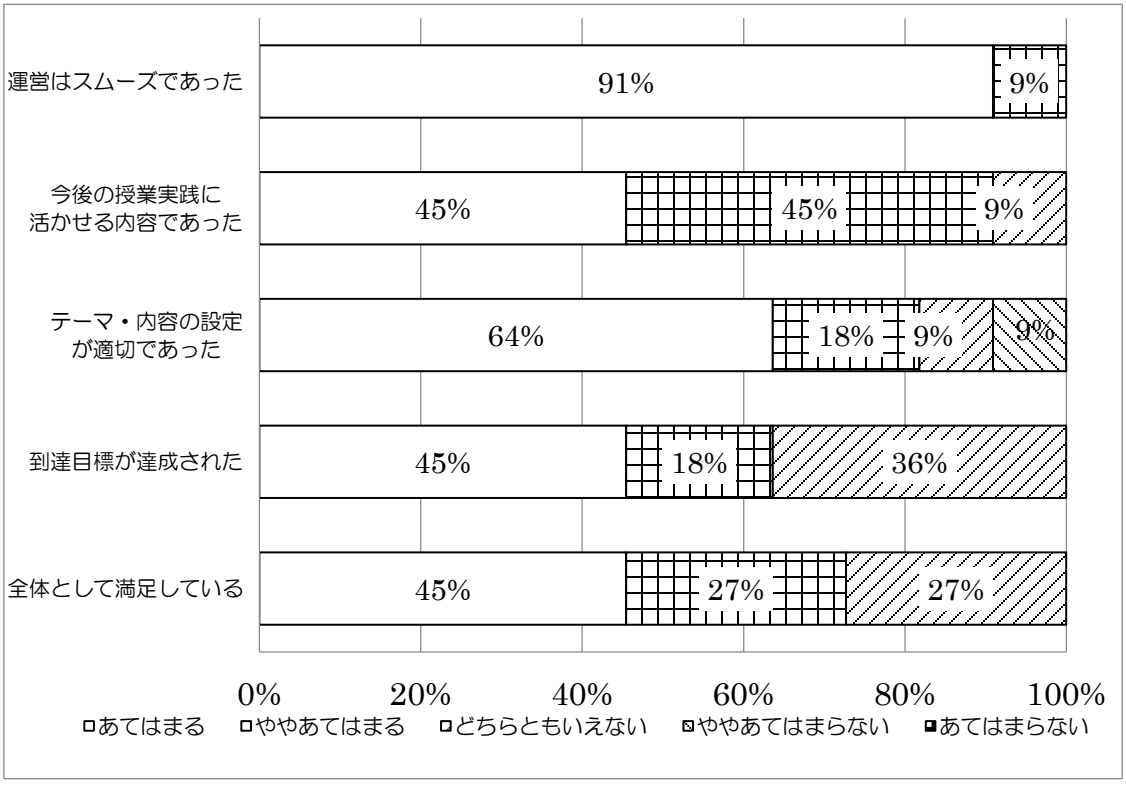
９．参加者：18名（受講証明書発行対象者：　名）

（内訳）

所　属	人　数
医歯薬学総合研究科（医学系）	1
医歯薬学総合研究科（保健学系）	1
教育学部・教区学研究科	4
工学部・工学研究科	2
水産・環境科学総合研究科	2
経済学部	2
多文化社会学部	1
地域教育総合支援センター	1
客員研究員・戦略職員	1
大学教育イノベーションセンター	3
計	18

１０．実施したＦＤの成果等

1.　参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）



Ⅱ．今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。

・企画運営ありがとうございました

・「大人数講義での工夫」というタイトルであったが，結果的に，大人数には限らない授業の工夫であったように感じた．自己紹介の重要性をあらためて認識した．

議論中心の授業で，知識がないもの同士の議論だけではあまりよい議論ができないように感じる．先生と学生との議論は，大人数の場合には（あるいは少人数でも）どのように行うべきなのだろうか？
「成人教育理論」という言葉は初めて聴いた．自分でも調べてみたいと思った．

・テーマ設定は極めて適切。ただし、講師のお話がテーマとやや見合っていなかった。浜田氏は、対象人数の多い授業を扱っていたが、グループワークの話が主で、講義パートそのものをどう工夫するかの話は少なかった。前田氏は、話は興味深かったが、やはり 50 人程度は「大人数」とは言い難い。私個人としては、100 人を超え、グループワークが容易ならざる環境になった時に、どう講義で学生を引き付けるのかを聞きたかった。

・浜田氏のお話は、「大人数講義の工夫をみんなで考える」という授業をかりに大人数に対して行ったらどうなるかという入れ子構造になっていて、話の全体がわかりづらかった。（私個人は社会科学系だが）浜田氏がご専門の医療教育についてもっと詳しく聞きたかった（質疑応答での、手の骨を 100 種類以上暗記するか、ボールを投げるときの骨と筋肉について実践的に考えるか、といった類の話、それに関連してトロントでの医療教育）。

・また、お二人とも、アイスブレーキングや自己紹介といった授業の導入部分についてはディテールがあって面白かったが、授業本体部分での工夫があまり披露されておらず、その点に不満が残る。
問題点ばかり指摘してしまったが、全体としては、このような機会を設けていただいていることに感謝しております。〃

・私自身の学生時代を思い返すと、一般教養があまり印象に残っていません。
それだけに注意を惹くことを工夫されている話を伺い、それが大切だと感じました。

・大変勉強になりました。次回の授業で実践したいと思います。
大人数講義でも工夫次第でアクティブラーニングが行えるし、それが必要であることが分かりました。一方で、どうしても伝えないといけない知識等をどのように授業に組み込んでいくかは、引き続き考えてみたいと思いました。

・国税庁からの出向者の経済学部准教授の田村と申します。前田先生のお話はとても楽しかったです。きっと授業もあんな感じなのかなと思って聞いていました。本当は無駄なことをせずに淡々と授業をして、それで学生に教授できればよいのですが、現実問題としてはそうもいかず、先生が授業と全く関係ないことを織り交ぜながら、学生に教授する下地作りに苦心されているのだなと、大変参考になりました。後期からの授業に活かしたいと思います。

・『大人への教育』理論に納得しました。お二人とも「主体的で対話的な深い学び」を実践されており、素晴らしいなと感じました。ありがとうございました。
アクティブラーニングに対する先生方の工夫がよく理解できました。

大人数ということで２～３００名の講義についてのヒントが示されると考えていたので多少見込み違いでした。ただ、利用できそうな点が２，３あったので活用を考えてみたいとお見ます。

・理論に基づく説明が学びになりました。初回、あるいはオムニバスの一部分の場合に大いに参考にできそうだと感じました。ありがとうございます。

一方で、両先生とも、授業準備に割いておられる時間（事前準備や事後のレポートチェック）がかなり多いと感じました。お二人とも年間授業担当数が自身に比べてかなり少ないように感じ、授業準備にそこまで時間をかけることができない場合、現状の時間的制約の中で、どのように大人数講義の準備を工夫できるか、追加するとしたら何か、学びの深まりをサポートできるかといった問題については未消化でした。話題提供の方は、もう少し違った立場の方がおられると、より多くの学びにつながる気がします。よろしくお願いします。〃

Ⅲ．長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。

・毎回興味深いテーマをありがとうございます

・本日，浜田先生よりお話のあった、「これまで講義形式に向いていると思われいた系統知識を教える授業科目を、アクティブラーニング型で行う方法」について詳しく知りたいと感じた.

・＜非常勤講師のアクティブラーニング論＞

世に出ているほとんどの AL 論が、専任教員を前提としている。しかし、現在は、大学はおろか、小中高でも非常勤講師が増えてきている。

小・中を念頭に置いた AL 論は学級経営論と結びついたようなものも多いが、非常勤講師にはあまり役に立たない。

高校・大学では、場合によっては半数以上の教員が非常勤であるケースもある。

非常勤講師は、教材にしても時間にしても使える資源が少なく、常勤講師ほど十分な授業準備ができない。授業外で生徒・学生と親密なコミュニケーションをとる機会も乏しいため、常勤講師に比べると圧倒的に不利な立場にある。

こういう状況のまま AL 論ばかりが優勢を占めるようになると、結局のところ、非常勤講師の善意（＝無償労働）に過度に依存することになってしまうのではないか。

私個人も、いくつかの大学や高校で非常勤講師をしており、協同学習や AL もかなり多用していると思っているが、同様な立場に置かれている人たちがどのような困難に直面しているのか、どういう打開策が（個人の努力だけではなく制度面も含めて）ありうるのかについて、課題が整理されているとよいと思う。

・大学入学時のリメディアル教育について

・高校内容のフォローアップが必要かどうか
・個別対応・指導時の教員側の注意について
・特にありません。
・今回とは逆ですが「少人数での講義の工夫」も知りたいと思いました。
・180 分講義をどう乗りきるか。
モジュール科目は，他学部の学生に，異なる分野の知識を教授することが目的なのか，それともアクティブラーニングが目的なのか。
両立するのであれば，どうすればよいのか。″
・ハイリスクローリターンのポートフォリオの改善

2.　　総　括

本 FD は大人数講義での工夫について具体策を紹介し、議論するために行われた。両講師に共通していたのは、講義初回の雰囲気づくり（講師の自己紹介も含む）に腐心しており、全体的に教員－学生間の双方向性を重視している点だった。また、両者とも大人数講義であっても少人数講義と変わらない姿勢で取り組む必要性を強調していた。これらは参加者にとって大変参考になったようである。

一方で、アンケート結果にもあるように、参加者からは講義内で伝達できる知識量を疑問視する声が複数上がり、「大学における（教養）教育とはどうあるべきか」という大きな問題への認識の差が露呈したように思われた。このことに関しては、今後別の FD が必要ではないだろうか。

（文責：多文化社会学部　才津祐美子）

１１．実施代表者の連絡先

教務委員会委員長　塚元　和弘
e-mail：ktsuka@nagasaki-u.ac.jp
電　話：内線 2003

１２．申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班
主査　寺川 美穂
e-mail：fd@ml.nagasaki-u.ac.jp　　電　話：内線 2077

【重要度２（指定外の配付禁止，教職員限り），教育支援課】

第 173 回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成３０年１０月２４日提出）

１．題　目：　合理的配慮についての理解を深める

２．日　時：　平成 30 年 9 月 26 日（水）　13:00-14:35

３．場　所：　A-12 番教室（教養教育棟 1 階）

４．主　催：教務委員会
　企画・実施：　評価・FD 教育改善専門部会

５．対　象：　全教職員（非常勤を含む）

６．長崎大学ＦＤに関する申合せ第２第１項の該当について【複数選択可】
　（該当するものに〇を記入すること）
　［　〇　］(1)　教員の教育活動に関するもの
　［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
　［　　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
　［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
　［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）
　合理的配慮の観点から、授業設計においてどのような点に問題が生じうるかを指摘することができる。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）
【講師】
ピーター・バーニック 助教（障がい学生支援室）
【内容】
　『障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第二次まとめ)』の要点を踏まえ、合理的配慮の基礎的な考え方を学びます。また、授業内での活動を適切に進めるためのポイントを確認していきます。

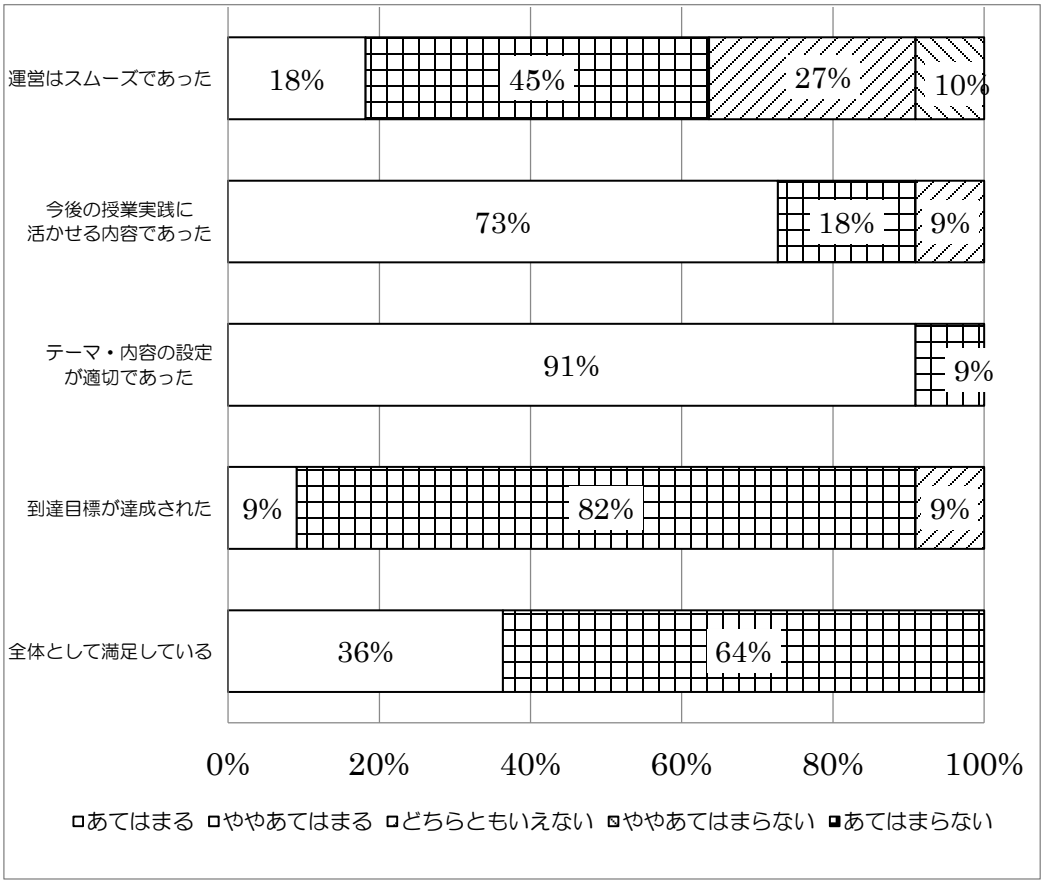
９．参加者：17名（受講証明書発行対象者：　名）

（内訳）

所　属	人　数
工学部・工学研究科	3
ダイバーシティ推進センター	1
教育学部・教育学研究科	2
水産・環境科学総合研究科	1
保健・医療推進センター	1
留学生教育・支援センター	2
医歯薬学総合研究科（医）	1
大学教育イノベーションセンター	3
医歯薬学総合研究科（歯）	2
地域教育総合支援センター	1
計	17

１０．実施したＦＤの成果等

1.　　参加者からの評価



Ⅱ.今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。

・合理的配慮が必要な学生への対応を考えることによって，普通の学生へも今までよりも有効な情報発信・教育ができそうな感じがしました。合理的配慮が対象者個人個人によって異なるため対応が難しい部分が多く，また，学生自身が配慮が必要だと分かっていないこともあるので，どこまでうまく配慮できるかは，教員の資質にかかわることかもしれませんが，可能な限り対応できる教員になりたいなと考えました。

・とても勉強になりました。合理的配慮に気をつけながら、今後指導していきたいと感じました。ありがとうございました。ただし、15 分時間オーバーは、運営上考えていただければと思いました。(率直な意見で申し訳ありません)

・ワークなどを用いてシラバス作成の問題点がわかり、今後に活かしたいと思いました。非常にためになったと思います。

・合理的配慮についての考え方を詰めた方がよかった。
例えば，ユニバーサルデザインの考え方なら，すべての教科について，試験をする必要がなくなる。でも本当にそれで良いのか。試験を無くしてよいのか。でも，試験をする説明は難しい。このジレンマを皆さんで考えたい。

・非常に興味深い内容で、今後学ばないといけないことが多いことに気付かされた。
個々の学生に対応する上で、中身濃い事柄について多くを検討する必要があるため、もう少し時間を長く取るか、到達目標を分けて構築し、2 回コースに分けた方が良いと感じた。

・シラバス作成について非常に参考になった。また、同時にこれまでのシラバスの書き方を反省させられた。

・設定時間について、せめてもう 30 分長ければと感じた。夏休み期間中に実施する FD についてはテーマにもよるかもしれないが、(特に合理的配慮にかかわる FD は)もう少し時間設定を長くしていただけるとありがたい。

・合理的配慮についての説明をしていただき、自分の中で漠然としていた概念が明確になりました。特にシラバスの重要性について認識しました。

長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。

・特にアイディアはありません。

・合理的配慮は良いテーマだと思いました。来年度もお願い致します。

・今回の合理的配慮のできなかった部分や，質問があった部分に対して，深く議論したい。

・学生の精神状態の把握法（心理カウンセラーの視点、精神科医の視点）

・学生のモチベーションを引き出し、維持する方法について

・入試問題の作成方法

・合理的配慮について

2.　　総　括

本 FD は、授業の計画段階、特にシラバスの作成時における合理的配慮についての理解を深めることを目的に行われた。合理的配慮に関する基本的な考え方に続き、シラバスに授業の内容や方法等を明記することは障害のある学生にとって授業選択の指標となるだけでなく、配慮や支援を必要とするかどうかを検討する上で重要な情報となることが説明された。後半の演習では、複数の実存のシラバスを使用して、それぞれ異なる特質の障害を持った学生が受講することを想定し、学生、教員それぞれの視点から、どのような困難が予想されるかを抽出し、これらの困難に対してどのような情報をシラバスに記載しておくことが重要かを検討した。アンケートでの満足度が高いことからも窺えるように、合理的配慮におけるシラバスの重要性が理解できた有意義な FD であった。運営面に関しては、前半の説明の部分を今回のテーマに絞り短縮し、演習への時間配分を増やす方がより効果的と考える。

（文責：水産学部　石橋郁人）

１１．実施代表者の連絡先

教務委員会委員長　塚元　和弘
e-mail：ktsuka@nagasaki-u.ac.jp
電　話：内線 2003

１２．申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班
　主査　寺川 美穂
e-mail：fd@ml.nagasaki-u.ac.jp　　電　話：内線 2077

【重要度２（指定外の配付禁止，教職員限り），教育支援課】

第173回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成３０年１０月１２日提出）

１．題　目：　高等学校でのアクティブラーニングの現状

２．日　時：　平成30年9月26日（水）　15:30-17:05

３．場　所：　A-12番教室（教養教育棟1階）

４．主　催：教務委員会
　企画・実施：　評価・FD教育改善専門部会

５．対　象：　全教職員（非常勤を含む）

６．長崎大学ＦＤに関する申合せ第２第１項の該当について【複数選択可】
　（該当するものに○を記入すること）
　［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
　［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
　［　　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
　［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
　［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）
　高校でのアクティブラーニングの現状について理解する。高校でのアクティブラーニングの効果と今後の方向性について理解する。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）
【講師】
畠山一馬 教諭（長崎県立西彼杵高等学校）
福田鉄雄 講師（長崎南山中学校・高等学校）
【内容】
　高校でのアクティブラーニングの実践事例とアクティブラーニングを取り入れた効果や今後の教育の方向性についてお話しいただきます。

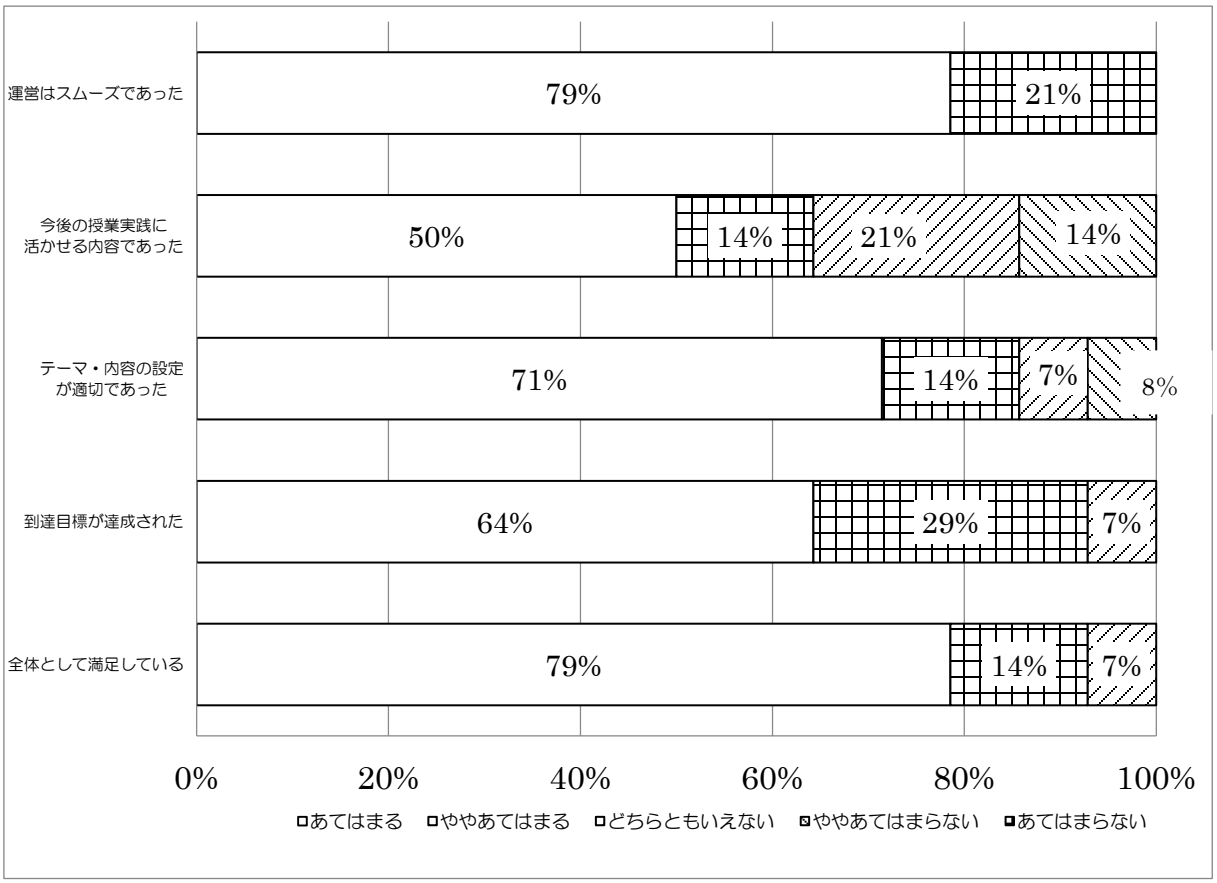
９．参加者：19名（受講証明書発行対象者：　名）

（内訳）

所　属	人　数
工学部・工学研究科	3
医歯薬学総合研究科（歯）	1
薬学部	1
教育学部・教育学研究科	5
経済学部	1
ICT 基盤センター	1
水産・環境科学総合研究科	1
客員研究員・戦略職員	2
大学教育イノベーションセンター	4
計	19

１０．実施したＦＤの成果等

1.　　参加者からの評価



Ｉ．今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。

・たいへん為になる講話でした。ありがとうございました。最近、生徒会活動もとても熱心とお聞きしていたのですが、納得しました。敢えて一言言わせていただければ、新学習指導要領から「主体的で対話的な深い学び」へチェンジしていくみたいです。そこに合うように、マイナーチェンジされればもっと長く続けられるのではと思いました。本当に今回はありがとうございました。

・大変貴重なお話を聞くことができました。
高校現場での AL 実施状況を踏まえて大学の AL では何を目指していくのか，この点でも高大接続が非常に重要になると感じました。
また，個別で質問させていただいた，発達障害の生徒たちの巻き込み方（差別しないで包摂していく）という考え方は，大学にも非常に大切な視点だと感じました。

・県下の高校での実践例は大変参考になった。実践例はよくできているといえる。というのは，小規模高校ならではのアクティブラーニングの実践であり，また高校ならではの，生徒一人一人のスキルやコンピテンスの成長を図る取組みが各教科の授業者だけでなく，授業観察と研究会を通して全教諭によって行なわれ，たんなる授業成果だけでなく生徒の成長のプロセスを重視するという点でうまく実践されていたと思う。それゆえこの実践例をただちに大学の講義で応用できるというものではない。ゆえに本講習の最後に高校と大学の間の実態の違いなども考察するような場が設けられたらもっとよかったと思う。そう思う理由は，講習の最後の質問者の質問に表れているが，実践例は授業後の成果の出来を重視するのではなくアクティブラーニングによる生徒の成長の過程が個々の生徒の能力を向上させることにつながっていることを大切にしていることに気づいていないように聞こえたからである。

・テーマ設定にあったお話で、実に有益だった。学校全体でこのような取り組みができることを非常にうらやましく思ったが、（イノベーションセンターに期待することとして）それを可能とする制度的環境についても、踏み込んで検討すべき。

・西彼杵高校の例で言えば、「周辺校」であること（ある意味で捨て鉢になれる）、生徒数が少ないこと、非常勤講師が少なく校長の意思が浸透しやすいことなど、協同的学びの実施に好意的な環境があったと思われる。地域社会や親の理解などについても知りたいところである。

・西彼杵高校というコミュニティにおいて「学びの共同体」という概念をコモンセンスとして浸透させることによって，コミュニティが良い方向に変化し様々な部分で高いパフォーマンスを示すようになってきている，ということには非常に感銘を受けました.
ただ，アクティブラーニング手法の導入とコミュニティ好転に相関関係があるのは明らかですが，因果関係なのか，慎重に見極める必要があると感じました．アクティブラーニング手法の導入をきっかけに「教員の意識が変わったこと」が原因のようにも思えました.

また、学生はこの先恐らく全く異なるコモンセンスを有するコミュニティに散らばっていくわけでしょうから、そこにおいて自分の足（「一人」という意味ではなく、「真の意味で能動的に」という意味）で歩いていくための力の育成、という側面から見たときにどのような評価となるのか．最も重要な観点ではないかと小職は思っています（もちろん大学の教育においても）．
アクティブラーニング手法を自分なりに解釈して授業に取り入れて実施してはおりますが、アクティブラーニング手法部分に対する改良を行えば行うほど上述の疑問がわいてきている現状です（導入の仕方が悪いだけという可能性を否定できませんが）．現時点における小職の理解レベルでは、アクティブラーニング手法は，例えて言うと、環境整備に思えてなりません．ある程度劣悪な環境（従来の放任型授業）を生き抜くという経験をせずにどうやってこれから待ち受ける劣悪な環境（社会）を生き抜く力を養えるのか、と．
決してアクティブラーニング手法を否定しているわけではありません．カリキュラム又は授業の中に適切に配置することによって効果を上げることができる手法の一つであるとは感じております．しかし，従来型授業によって養われる力についてあまりにもスポットが当たっていない気がしているので，書かせていただきました．〞

・特になし
・アクティブラーニング（AL）には少し否定的な考えを持っていましたが、今回の FD で意見が変わりました。フロアーの方から最後に、AL は本来学生個人が AL しなくてはならないのだから、高校主導型の AL ではどうか、みたいな質問があっていましたが、クラブ活動に積極性が見られたとか、70 周年記念の劇を作るなど、高校主導型の AL でない面も見られていることから、西彼杵高校での取り組みは功を奏していると思いました。また、内容は具体的にはよくわかりませんでしたが、日々の授業を AL にされているようで、我々が、授業時に示すもの、例えば、英語の文法については、それをプリントとして渡し、それを元に AL をやられているようですね。間違って理解しているのかもしれませんが。この方法だと確かに通常授業に比べて時間がかかるということはないと納得しました。AL が授業の学びだけではなく、生活全体の積極性に貢献するということがわかったことが今回の大きな収穫でした。これからは、講義室は、今のように黒板向きの机ではなく、円卓やボックス対応の席が、標準型になるように作るべきですね。それだと、AL 型授業に対応できるし、今までのような講義型授業でも使用できます。何といっても、AL 授業のたびに机を動かす手間が省けます。もっとも、多くの教室では動かすことすらできませんが。
・アクティブラーニングの構築とその努力について理解できました。高校の教諭であり，勉強を教えることが仕事であれば、その努力も報われると思いましたが、大学教員にへ教育の他に研究もあり、研究しか評価されません。ここまでの努力は出来ないだろうと感じました。

・時間の関係で聞けなかったが、AL を導入されている状況において、授業時間外の宿題について、その位置づけや工夫をお聞きしたかった（単位の実質化の観点から）.
・質疑応答の時間がもう少しあると良かった。
・結局，テストの点数（いわゆる学力）が向上したのかどうかが知りたかった
・数学の授業でもこうした取り組みが可能であることがわかり、大変興味深かった。通常の課題とジャンプの課題の具体的な例をもっと見てみたいと思いました。
・私が担当する科目が 50 名から 90 名程の科目が多いため、ちょっと応用が難しい（目が届かない）と感じました。ただ、大学院などの少人数科目では、今回紹介して頂いた手法を取り入れてみたいと思いました。
・大人数の講義でも有効なアクティブラーニング手法についても話が聞きたかった分だけ、また、他の手法の紹介も聞きたかった分だけ、評価が低くなっています。申し訳ありません。

Ⅱ．長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。

・特にありません。
・今回のように、外部講師をお招きしての FD はとても新鮮で有益であると感じます。今後も機会があれば是非実施をお願いいたします。″
・特になし
・＜非常勤講師のアクティブラーニング論＞
第３回（「大人数講義での工夫」）の感想で書いたことと同じです。今日はその点の質問もしてみました。私の場合、非常勤の先生が半分近くを占める高校で教えているので、西彼杵高校のような全学的取り組みが、そのまま適用できるようには思えません。
＜アクティブラーニングの高大連携＞
工学部の先生が質問されていたが、高校での「強制力のある」アクティブラーニングが外れた時に、学生が自ら学ぶことができるかどうか。それは高等教育の担うべき課題だと思うが、学校種を通貫したアクティブラーニング論はあまり見たことがない（どちらかというと、キャリア形成論に研究者の視点は傾斜している？ 私の勉強不足かもしれませんが)。
・今回のように、高校の実態を取り扱う内容があると面白い。
・長崎大学の学生が考えるアクティブラーニング。
・学生がどう思っているのか、モジュールで満足している科目はどれか。
・授業評価などからの考察ができませんか。
・反転学習のような授業をしようとすると、授業（講義）で教科書に書いていることを説明してくれなかった（教科書に書いていないことばかり説明していた、と授業

アンケートに書いてしまう学生の意識改革
・高大連携、（あれば高大接続）について
・英語でのメールのやりとりのときの注意点や好まれる表現集のようなもの
・レビュアーへの回答を作成するときに好印象に受け取ってもらえる書き方
・大人数の講義でも有効なアクティブラーニング手法について

2.　　総　括

今回のFDは、西彼杵高校教諭の畠山先生と前校長の福田先生のお二人による、全学FDとしては珍しいと思うのですが、講演形式のFDでした。講演題目は「高等学校のアクティブラーニングの現状」ということで、外部から講師の先生をお招きするということで、参加者が少ないと申し訳ないと思っていたのですが、それは、無用な心配で、２０名の参加者がありました。私は、西彼杵高校について、全く予備知識なしに参加したのですが、【学びの共同体】による学校改革を推進していることで、県内のみならず、全国から注目を集める高等学校になっているということを、既にご存知の参加者もおられたかもしれません。また、一方で、本学でモジュール教育が始まった頃には、アクティブラーニングのスキルを学ぶFDも多く開催され、私自身も、実践を試みるも、多くの問題点に遭遇することもしばしばで、同様の経験をお持ちの先生方で、高校でのアクティブラーニングに興味を持って、参加された先生もおられたのではないかと思いました。お２人の先生方の、お話は、よく練られており、最後に報道のビデオなども交え、比較的長い講演にもかかわらず、参加者が非常に、熱心に聞き入っているのが、印象的でした。そのため、質問時間が不足するくらいの活発な議論が行われたように思います。それは、今回のプログラムについて寄せられたフィードバックシートにも表れておりますが、私が、とても総括しきれないほどの多くのご意見や感想が寄せられております。私は、単純に、創立70周年の記念事業の一環として文化祭で上演された劇の動画を観て感銘を受けた者ですが、このような、高校でのアクティブラーニングを経験した学生が、数多く大学に入学するようになれば、我々は、スムーズにアクティブラーニングを進めることができるのか、はたまた、今一歩、進んだアクティブラーニングに高める必要があるのか、やはり、悩みは尽きません。

（文責：医歯薬学総合研究科　　中山守雄）

１１．実施代表者の連絡先

教務委員会委員長　塚元　和弘
e-mail：ktsuka@nagasaki-u.ac.jp
電　話：内線2003

１２．申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班
　主査　寺川 美穂
e-mail：fd@ml.nagasaki-u.ac.jp　　電　話：内線 2077

【重要度２（指定外の配付禁止，教職員限り），教育支援課】

第173回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成３０年１０月２４日提出）

１．題　目：　プレゼンテーションの評価観点と聴衆の集中を導く話し方のコツ

２．日　時：　平成30年9月27日（木）　13:00-14:42

３．場　所：　A-12番教室（教養教育棟1階）

４．主　催：教務委員会
　企画・実施：　評価・FD教育改善専門部会

５．対　象：　全教職員（非常勤を含む）

６．長崎大学ＦＤに関する申合せ第２第１項の該当について【複数選択可】
　（該当するものに○を記入すること）
　［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
　［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
　［　　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
　［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
　［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）
　プレゼンテーションの評価観点を自分の言葉で説明できる。聴衆のアテンションを維持する話し方の工夫のしどころを理解し、実践できる。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）
【講師】
矢野香 准教授（地域教育総合支援センター）
【内容】
　プレゼンテーションを評価する際の観点を知り、それを踏まえた実践的・体験的な活動によって、プレゼン指導と話し方の工夫のしどころを体得していきます。

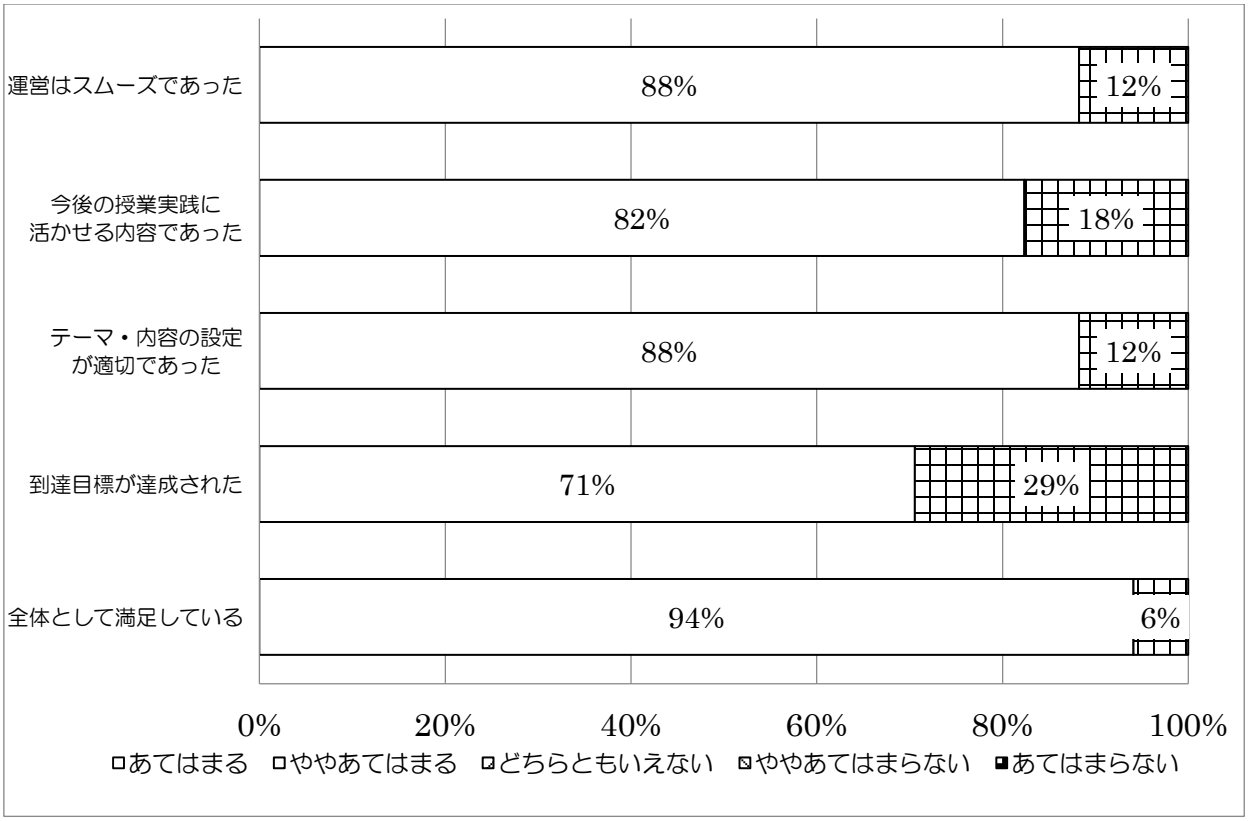
９．参加者：25名（受講証明書発行対象者：　名）

（内訳）

所　属	人　数
教育学部・教育学研究科	2
工学部・工学研究科	6
ICT 基盤センター	2
病院	2
医歯薬学総合研究科（医）	1
水産・環境科学総合研究科	3
熱帯医学研究所	1
核兵器廃絶研究センター	1
海洋未来イノベーション機構	1
ダイバーシティ推進センター	1
技術職員	1
戦略職員	1
大学教育イノベーションセンター	3
計	25

１０．実施したＦＤの成果等

1.　　参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）



Ⅱ．今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。

・大変勉強になりました。ありがとうございました。
・発表内容も、講義の進めかたも、わかりやすく、また関心を十分にひくやり方で、大変充実していました。第一印象の重要性、「やっぱり」（よい意味で）を感じさせる講義・講演のやり方について、大変参考になりました。
・とにかく、内容がわかりやすく、自分に活かせる点が多くあったと感じました。
・時間的に制約があるのか、より実際の流れの中での気にした方がいい点などもっと知りたいところがあったので、第二回などあると非常に有難いです。
・始めて知った点、再確認出来た点など、わかりやすく、興味深い内容でした。
・実際のプレゼンテーション映像を見ながら、先生の評価と自分の評価でどれくらい違いあるのかないのかを確認したかった。
・具体例(実技を含む)を挙げるなど、講義内容が非常にわかりやすかったです.
・矢野先生もご多忙のなか、最後まで質問に真摯にお答えいただき、ありがとうございます。
・今後、講義や講演で役に立つ内容であった。
・自分のプレゼンの立ち振る舞いを客観視できた。
・自分が課題に感じていたことについて、その原因がわかり、解決できた。
・素晴らしく，すぐにでも役に立つ内容でした。
後で質問されていた先生が「要するに印象操作でしょう」とおっしゃっていましたが、僭越ながら先生方の少なくない方々がご自身が「見られている職業」に就いていらっしゃること，そして他人から見た「印象」を軽んじられているように思います。「研究はすごいみたいだけど授業はね」から、「研究もすごいけど，授業もやっぱりすごくいいんだよ」と言われるために、こうした実践を重ねていくことは重要だと感じました。
・たいへん有意義な講義・演習でした。感動しました。
・是非、長崎県教育センターで、研究援助や出前講座を行う指導職の先生方全員に聴講してもらいたいです。まずは、私自身が最初の印象作りを頑張ります！
素晴らしい講義、ありがとうございました！！
・いろいろと参考になりました。
・とても有意義なワークショップだったと感じました。ありがとうございました。
講師の先生が、元 NHK のキャスターだけあって、発音を含めた話し方も素晴らしく聞きやすく、また経験に基づいていて実践的な講演でした。
大変参考になりました．外部での講演だけでなく学内の講義などでの実践の方法を具体的に提示していただけたので，今後是非取り入れていきたいと考えています。
・先生には以前講演の司会をして頂いて、大変お上手で感謝しています。
今回はそのコツをわかりやすく教えていただきました。今後、活かしていきたいと思います。

特に自己紹介のところは、今回作成したものを司会者に渡そうかと思います。

Ⅲ．長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。

・また矢野先生の講義を伺いたいです。
・参加できていないのですが、話す際に相手の立場に立ってという考え方の詳細な部分などを知りたいです。
・このＦＤの続編をお願いします。
・多様な学生がいますので、どのように接していけば良いか。
学生や教職員のなかでも、コミュニケーションの取り方に困惑している方が多数いると思いますので、それに役立つテーマ(話し方等)。
・また次回もお願いしたいです。
・特にありません。
・テーマ、内容については、特にアイディアはありませんが、開催時期をもう少し早めにして頂けると参加しやすいと思いました。
・また矢野先生の講演を、お時間のある際で構わないから、矢野先生が考える授業でのこういうやり方のオススメのようなセミナーを希望します。
・数学科目などでのアクティブ・ラーニングの具体的な方法について

2.　　総　括

本 FD は矢野香准教授（地域教育総合支援センター）に、プレゼンテーションをする側としてどのような点に配慮すべきかを中心に、聴衆の集中を導く話し方のコツについてご講演いただいた。本 FD のテーマは「やっぱり」であり、話し手は聞き手から効果的な「やっぱり」を引き出すことが、プレゼンテーションの効果を高めるために重要であるという指摘がなされた。講演の中では、話し手が聞き手の「やっぱり」を引き出すための数々の具体的な工夫や注意点が示された。

その「やっぱり」を引き出すための「自己紹介を考えるワーク」も行われた。プレゼンテーションの前に、自身のこれまでの経歴や実績を効果的に聴衆に伝えることで、その後のプレゼンテーションが引き立てられるというものである。ペアになってお互いを紹介し合うワークも非常に盛り上がった。数名の参加者が全体に向けて自己紹介を行ったが、たしかに、自己紹介をきちんとすることで、話し手に対する聴衆の印象は大きく変わると感じられた。

本 FD は授業や講演や学会発表をするさいに、すぐにでも取り入れられるポイントが多数示されており、非常に実践的であった。参加者からの意見も非常に有益だったとの意見が多数であり、また、本プログラムの継続的な実施を期待する意見も多いことから、非常に有意義な FD だったと言える。

（文責：大学教育イノベーションセンター　成瀬尚志）

１１．実施代表者の連絡先

教務委員会委員長　塚元　和弘
e-mail：ktsuka@nagasaki-u.ac.jp
電　話：内線 2003

１２．申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班
　主査　寺川 美穂
e-mail：fd@ml.nagasaki-u.ac.jp　　電　話：内線 2077